

## 《変容福島県》

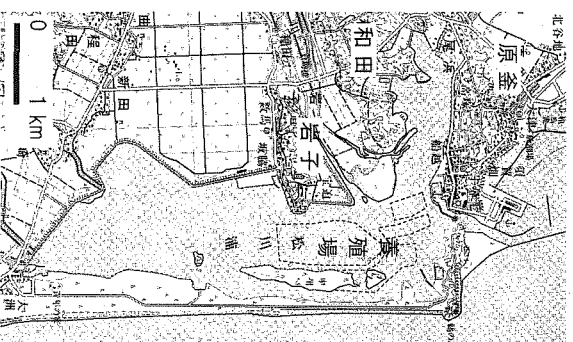
## 松川浦ノリ養殖業の変容

高野 岳彦\*

1. 松川ノリ養殖の推移<sup>1)</sup>

ラゲーン<sup>2)</sup>の風景美で知られる松川浦は、近世より製塩が盛んに行われ、相馬藩士によってカキとノリの養殖も始められた。製塩業は専売化された明治38年以後衰退し、それに代わって黒ノリ（アサカサノリ）の養殖が導入された。明治末年、浦口が掘削されて海水の通りが良くなり、大正期には浦中南部の和田や岩子（第1図）にもノリ養殖が広がった。1950年頃から60年代中ばにかけて、松川浦は黒ノリの良質の天然採苗地として全国に知られるようになり、種網は東京湾や伊勢湾の養殖地に出荷された。この頃は「水面に1・2週間網を張り種子が付着した網が飛ぶように売れた」（河北新報、2004）という。その後、胞子を海中ではなく水槽中で繁殖させる人工採苗技術の普及により天然採苗地としての意義は失われた。

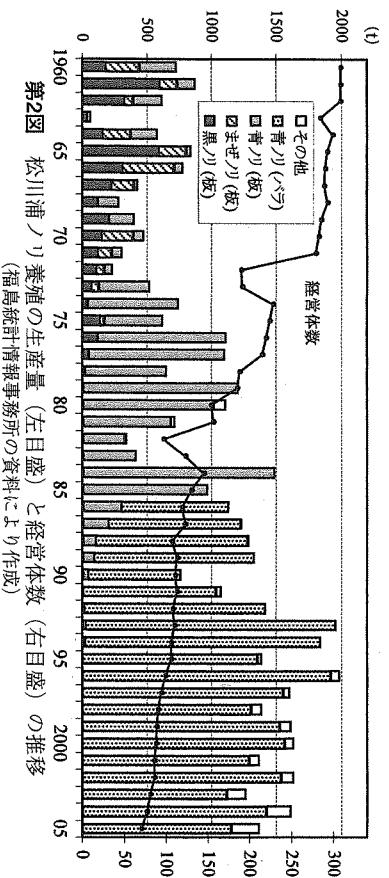
1970年頃、病気に弱く、また西日本での増産で価格が低迷した黒ノリから青ノリ（ヒロハヒトエダサ）に転換し、1974年からは三重県漁連に出荷するようになり、86年頃からは加工形態も板ノリから多様な用途への利用が可能で作業も簡略化された「バラ干し」<sup>3)</sup>形態に変わった（第2図）。全国



第1図 松川浦の概況

のバラ青ノリの生産の半分は三重県が占めており、松川浦の青ノリも三重県漁連に佃煮やふりかけの原料として出荷される。

ノリの養殖作業は、8月の網づくり、9月の採苗のための海上固定、9月下旬の仮植、10月の本養殖、その後の高さの調整などの網管理を経て、12月中旬から4月にかけて2回収穫される。

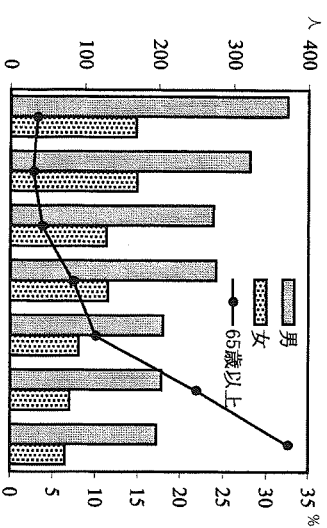
第2図 松川浦ノリ養殖の生産量（左目盛）と経営体数（右目盛）の推移  
（福島統計情報事務所の資料により作成）

## 2. 生産構造の変化

1985年円高以降の農林漁業の全般的な困難の中にあつて、松川浦のノリ生産量は1990年代以降増加してきたことは注目に値する。他方で経営体数は減少を続けていることは、1経営体あたりの施設規模の拡大を意味する。ノリ養殖面積規模別経営体数の推移を示した第1表をみると、1980年前後に構造変化が起きたことがわかる。その契機は省力化のための乾燥機の導入であった。

第2表は、専業兼業別・兼業種類別の漁業経営体数推移である。これにはノリ養殖以外の漁家も含むが、各年6～9割はノリ養殖漁家であるので、概ねその兼業形態が把握できる。ノリ養殖は元来、和田や岩子の沿岸集落の農家の兼業として「半農半漁」形態で行われてきた。第2表をみると、1983年以降、主な兼業種目が農業である漁家数は急減し、常雇勤務や民宿兼業の割合が高まった。他方で、福島統計情報事務所による1999年7月の調査では、87漁家のうち75%が農業兼業と答えている(福島統計情報事務所原町出張所、2000)。これら

の意味するところは、半農半漁がなくなったわけではなく、おそらくはこの時期の常勤兼業へのウエイトの高まりと、米価低迷と減反強化による農業収入の低下を示すものであろう。この調査では、養殖規模の大きい漁家ほど農家である割合が高く、農業経営規模も大きいことが報告されている。その他の兼業種では、海浜立地を生かした民宿が多かったが、2003年ではピーク時の3分の1にまで減少した。



第3図 松川浦における漁業就業者の属性

男女別人数：左目盛、65歳以上比率：右目盛  
(漁業センサスにより作成)

第1表 松川浦のノリ養殖面積別経営体数の推移

	1973	1978	1983	1988	1993	1998
10000㎡以上	1	1	2	2	2	3
5000～10000	1	3	40	60	63	54
3000～5000	9	37	36	32	24	24
2000～3000	34	73	14	13	7	4
1000～2000	100	65	14	6	2	1
500～1000	87	17	4	2	2	1
300～500	3	20	1	1	1	2
合計	234	216	110	116	100	84

(漁業センサスにより作成)

第2表 松川浦における専業・兼業別漁業経営体数の推移

	1973	1978	1983	1988	1993	1998	2003
漁業経営体数	252	240	197	187	135	129	123
専業漁家	11	9	12	13	18	11	19
兼業漁家	241	231	185	174	117	118	104
農業	221	168	45	49	32	12	38
水産加工	1	0	0	0	0	2	0
逆漁業内	17	2	2	1	0	0	0
民宿	26	28	33	34	20	16	13
他自営業	25	10	22	14	11	10	3
漁業面われ	2	2	0	7	1	3	1
漁業外常雇	59	15	67	56	50	66	47
漁業外雇	105	6	16	13	3	9	5

(漁業センサスにより作成)

漁業就業者の属性では(第3図)、女性が多く参加していることは浅海養殖業の特色である。近年、青ノリの価格がキロ2400円だった1995年頃の半額以下に下落して養殖収入は500万円を割り込む状況という(河北新報、2004)。そして就業者の高齢化も急である(第3図)。そうした中で松川浦では、絶滅危惧種となったアサケサノリの自生や、ホンガレイ稚魚の生存率の向上が確認されるなど、貴重な環境として注目を集めている。

## 注

1) 本節の記述は以下の各文献による。

安田初雄(1971)：松川浦とのり養殖。日本地誌研究所：『日本地誌』朝倉書店、pp.524～525。

河上税(1978)：ノリとカキの養殖。新福島風土記刊行会

『福島県の歴史と風土』創土社、pp.329～330。

福島統計情報事務所原町出張所(2000)：『相双地域の

漁業とのり養殖』、p.22。

河北新報2004年9月21日記事「潟と暮らす」。